

## 牧野義雄の初期英文随筆 — 一九〇一年から一九〇四年までの活動を中心に —

Yoshio Markino's Short Essays in English Magazines 1901-1904

中地 幸

NAKACHI Sachi

### 一 牧野義雄の文筆活動

二十世紀初頭のイギリスで「霧の画家」として評価された牧野義雄の芸術を考えると、彼の活動が画家であることと文筆家であることの両輪により支えられていたことは忘れてはならないだろう。

文筆が彼の画家としての人生を切り開き、また絵画が彼の文筆家としての活動に幅を与えたのである。もともと、作家になるか、画家になるかを悩んでいた際に、当時のアメリカ総領事珍田捨身に画家になるほうを勧められ、サンフランシスコでは美術学校に入学した牧野であるが、生涯、彼は絵筆とペンの両方を持ち続けた。とりわけ、一九一〇年代には、彼は数々の挿絵入りの英文随筆を矢継ぎ早に出版する。ロンドンでの留学生活を描いた『日本人画工倫敦日記』(A Japanese Artist in London) [図1] は一九一〇年に出版されるが、出版後、瞬く間に評判となり、英国のジャーナリズムから高

い評価を受けた。この成功を受け、牧野は、同年、子供時代を回想した『幼少時代思出の記』(When I Was a Child) を出版している。さらに一九一二年には、イギリス女性を褒め称えた『わが理想の英国人女性たち』(My Idealized John Bullesses) [図2] を、一九一三年には『述懐日誌』(My Recollections and Reflections) という回想録を出版している。そもそも、カラー三部作として知られる『カラー・オブ・パリ』(The Colour of Paris, 1908)、『カラー・オブ・ローマ』(The Colour of Rome, 1909) や『内側から見たオックスフォード』(Oxford From Within, 1910) における風景スケッチが評判となり、牧野は注目を浴びようになるのだが、これらの本には、挿絵だけでなく、牧野の短い随筆が載せられており、代表作のほとんどにおいて、牧野は画家としてだけではなく、文筆家と

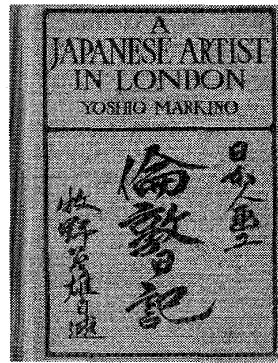


図1 *A Japanese Artist in London* (1910)

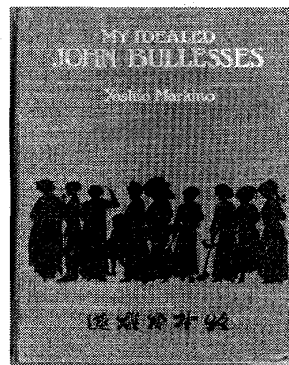


図2 *My Idealized John Bullesses* (1912)

して登場しているのである<sup>1</sup>。

ところで、牧野の水彩画の魅力については、最近ではかなり定評があるが、文筆家としての側面は、あまり分析されてこなかった。

そもそも牧野義雄の英文著作は、ロンドンの漱石博物館館長の恒松郁生氏によって発掘され、紹介されたことにより日の目を見たもので、それまでは、ほとんど埋もれたままだったのである。さらに問題は、牧野が出版した本のほとんどが自伝であったことである。赤貧の生活からロンドンの社交界の寵児となり、重光葵のような歴史に名を残す政治家と親しく交わった。牧野の人生そのものが波乱万丈で興味深いため、牧野の自伝は牧野義雄像を描き出すための資料としての扱いを受けてきたのである。しかしキョウコ・モリなど日本人として生まれながら英語圏世界で文学作品を発表するトランスナショナルな作家が増える現在、日本人が母国語ではない外国語を使い自己表現をしていくことの意味について考えることは極めて重要なことなのである。また現在では、日本人の留学熱に伴い、留学体験記というものも数多く出版されているが、留学体験記が文学とし

て注目を集めることはほとんどない。しかし日本人が西洋の異文化をどのように受け止め、どのように語るかという問題は極めて文学的にも興味深い主題である。ちなみに牧野義雄は夏目漱石と同時期にロンドンに滞在しているが、牧野義雄が見たロンドンと夏目漱石が見たロンドンが、どのように重なり、どのようにずれるのかを検討することは、明治期の日本人の西洋との邂逅を考察する上でも役立つだろう。

ところで、牧野義雄の作品を考えるにあたって、無視できないことのひとつは、彼が英米のジャポニスム文学の全盛期に生きたという事実である。イギリスのジャポニスムは十九世紀末から二十世紀初頭を頂点とする。一八八五年にロンドンのサヴォイ・シアターで初演されたギルバートとサリバンのオペレッタ『ミカド』が英米のジャポニスム・ブームに火をつけたことは言うまでもないが、一八九六年四月に初演されたシドニー・ジョーンズのオペレッタ『ゲイシャ』は一八九八年の五月二十八日までに七六〇回も上演されたという。文学の世界では、サー・エドワード・アーノルドが一八九〇年代には「ムスメ」(“The Musmee”)など、日本女性を題材にした詩を発表しているが、「ムスメ・ブーム」に乗じて一八九五年に出版されたクライブ・ホランドの小説『僕の日本人妻』(My Japanese Wife) [図3]は六万部売れたと言う<sup>5</sup>。また、後に牧野に挿絵を依頼するダグラス・スレーデンは、一八九〇年に『日本の結婚』(Japanese Marriage)を、そして一八九二年に『ジャップス・アット・ホーム』(Japs at Home)を出版している。ジェームズ・マードックは『あやめさん』(Ayame-san: A Japanese Romance of the 23rd Year of Meiji)を一八九〇年に出版しているが、この本

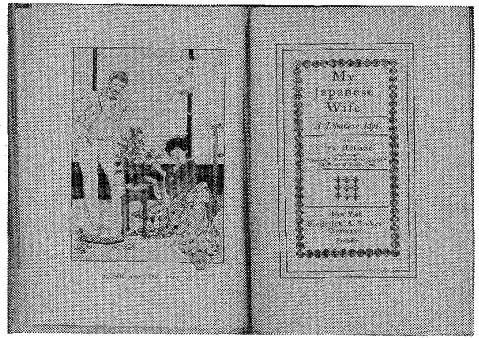


図3 Clive Holland,  
My Japanese Wife (1895)

も版を重ねているところを見ると、かなり人気だったのだろう。

イギリスでのジャポニスム・ブームは日清戦争、日露戦争を経て、一九一〇年代までは続いている。一九〇〇年には川上音二郎一座のロンドン公演が行われ、好評を博したが、アメリカで制作された日本劇『蝶々夫人』は一九〇一年に、また『神々の寵児』は一九〇三年にロンドン

で上演されている。このような日本ブームを裏付けるかのように、雑誌『アカデミーと文学』(The Academy and Literature)の一九〇四年一月の号には、極東についての本のリストが掲載されているが、日本の項目には、歴史書十二冊、日本社会についての本が十三冊、芸術についての本が三冊、旅行関係書十一冊、日本滞在記十一冊、小説十冊が紹介されている。ちなみに、この中には、ラフカディオ・ハーンやパーシヴァル・ローウェル、タウンゼント・ハリス、W・E・グリフィス、オノト・ワタンナなどアメリカで出版した作家の本も紹介されており、イギリス人が積極的に米国人による日本についての書物も読もうとしていたことがうかがわれるのである。

牧野が執筆した『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』(The English Illustrated Magazine)においては、日露戦争が始まった一九〇四年に日本を取り扱う記事が相次ぐ。例えば、一九

〇四年の五月号には、クライブ・ホランドが「菊の土地の女性と少女たち」という随筆を寄稿しているが、日本女性の写真をのせながら、いかに日本女性が「女性的」であるかについて語っている。そして翌六月号にはチャールズ・ソンガーが「ハナさん」という短編小説を掲載している。また一九〇四年の九月号には、オノラ・トワイクロスが「ジャパニーズ・ピクチャーズ」というタイトルで美術評論を書いている。

さらに、日本記事の多い雑誌が『アイドラー』(The Idler)である。一九〇三年から一九〇四年の雑誌を編集した二十四号には、「君が代」が紹介されている。また一九〇九年発行の三十五号には、「ミヨコ」というH・ナイト・ハリスによる蝶々夫人型のセンチメンタル小説と「三つの日本の寓話」という物語記事が収められている。また一九一〇年に発行された三十七号には、デイヴィッド・コルヴィー・スチュワートの『ヒューマン・ジャパン』という写真入りの日本旅行記がおさめられているが、印刷された写真九枚のうち、日本女性を写したものが六枚もあり、相変わらず日本への興味は、日本女性への興味へと還元されている様子を見ることが出来る。

このようなジャポニスム・ブームにのって英語で作品を出版した日本人として、現在もつと有名な人物は、『武士道』の新渡戸稲造、そして野口米次郎と岡倉天心であろう。とりわけ、野口と岡倉の場合、その出版は、イギリスとの関係が深い。野口はアメリカで『日本少女の米国日記』(The American Diary of A Japanese Girl, 1902)を出版した後、友人のチャールズ・スタッドワードより助言を受け、詩集『東海より』(From the Eastern Sea)をイギリスの出版社から出版しようと企んでいた<sup>11)</sup>。しかしながら思い通りに出版社

が見つからず、結局は、一九〇三年の一月に自費で印刷所に印刷を頼むのだが、それをイギリスの知識人に手当たりしだい郵送したのが功を奏した。これが、私家出版であるにも関わらず、書評が雑誌に掲載されるといふ異例の事態を引き起こし、その後すぐイギリスのユニコーン・プレスが出版を申し入れてくるのである。<sup>12</sup>一方、岡倉天心の場合も、英文著作『東洋の理想』(Ideals of the East, 1903)はロンドンのJ・マレイ出版を初版とする。その後岡倉は『日本の目覚め』(The Awakening of Japan, 1904)、『茶の本』(The Book of Tea, 1906)を英米で出版するが、このような出版を可能としたのは、岡倉の実力以上に、英米人の強い日本への関心であったといえるのである。

牧野も例外ではなかった。牧野の晩年の友人であったベティ・シェパートの回想によれば、「牧野の全盛期はエドワード朝のロンドンで彼が有名になった今世紀の最初の数年間<sup>13</sup>であったという。実際、牧野義雄が、ヨシオ・マルキーノ(Yoshio Markino)として次々と本を出版したのは一九一〇年代までで、それ以降はほとんど目立った文筆活動はない。牧野義雄もまた時代の申し子であったのである。

本稿は、以上の点を念頭に置きながら、牧野義雄の初期の英文随筆がどのようなものであったのかについて、紹介および解説をしていきたい。なお、文学者牧野の活躍の頂点は、留学体験記である『日本人画工倫敦日記』と故郷の拳母での思い出を綴った『幼少時代思出の記』、夭折の洋画家、原撫松との思い出を綴った『述懐日誌』などの作品群であるが、本稿では、無名時代の牧野義雄が雑誌に掲載した記事を取り扱う。というのも雑誌に掲載

された牧野の随筆については、ほとんど内容的な紹介がされていないからである。しかしながら、これらの随筆こそ、牧野義雄の存在をロンドンの一般市民が目にした最初のものであり、それがどのような内容であったのかについて分析することは意義あることのように思われる。なぜ牧野義雄がロンドン社交界の寵児となったのか、何がイギリス人たちにアピールしたのか、それらを解く鍵が雑誌に掲載された記事には隠されているように思われるのである。

ところで牧野は一九四二年に日本に帰国するが、一九三〇年代より英米での経験を日本語で本にまとめている。一九三五年には『滞英四十年今昔物語』を改造社から出版しているが、これはイギリスでの生活の経験をつづった随筆集である。また一九四二年には『英国人の今昔』を那阿出版から出版している。さらに一九五六年には、暮らしの手帖社から『あさきゆめみし』を出版しているが、こちらはアメリカでの経験を中心にした回想録である。これらの日本語での書物は、同じ海外経験を題材としながらも、英文の随筆とは異なった視点で書かれている点も多い。

例えば『あさきゆめみし』では、牧野の留学中に亡くなった姉の堀田まきへの思いが主軸となっているが、英文著作において堀田まきが重要な人物として登場することはない。英文で書かれた『幼少時代思出の記』では、堀田まきについての言及はあるが、牧野の海外渡航を引き止めた女性として名前も与えられずに登場するだけである。しかし『あさきゆめみし』では彼女が牧野の妻であったことが示唆され、彼らが発前に人前も憚らずに熱い抱擁を交わしたことや、牧野が薬指に金の指輪をして出発することなどが描かれている。『幼少時代思出の記』を翻訳した宮澤眞一氏

は、英文著作において牧野があえて堀田まきとの内縁関係を隠蔽していると考えられているが、『あさきゆめみし』の出版社が女性読者を多くもつ「暮らしの手帖社」であること、またこれが自著ではなく松岡弘子による口述筆記であることを考えるなら、むしろ『あさきゆめみし』において、堀田まきと牧野義雄の「ロマンス」が誇張され、脚色されている可能性もある。牧野の随筆集は、経済的な理由から出版されたという部分が強いと考えるならば、内容はかなり操作されたものであったと判断するのが無難なのである。

実際、牧野義雄の人物像をどのように描いていくかは難しい問題である。重光葵の伝記を書いた渡邊行男は『重光葵』（中公新書、一九九六年）のあとがきに次のように書いている。

筆者にとって一つの謎であったのは、重光がロンドンの空爆下に、牧野義雄という老画家を大使公邸に引き取って、日本に連れ帰り、空爆下の食料難の時代、疎開にもこの老画伯を伴い、家族の一員として遇していることである。あれは何だろうと思っていた。篤氏の話では、重光が東嶋から出ると、この老画伯のために個展を開き、相当な金をつくってやった。するとイノセントなこの老童は愛人をつくって出奔した。あげく、金は女に持ち逃げされ、病を得て帰るに帰られない。これを聞いて、重光は篤氏に金を持たせて病院に届けさせたという。そこまでしなくとも、と誰しも思う。（二四六頁）

重光葵と牧野義雄の親密な関係についてはここで詳しく述べるつもりはないが、おそらくなぜ重光葵が牧野義雄にそこまで惚れ込んでいたのかについては、牧野義雄という芸術家をよく知らなければ、決して理解できるものではないだろう。しかし、同時に牧野義雄と

いう人物の実像は極めて見えにくい。彼は、子供のように素直な心を持った天才的な芸術家として理想化されるか、我侷勝手な芸術家として描き出されるかの、両極端に陥りやすいのである。本稿は、そのような点を意識して、できるだけ客観的な視点から文筆家としての牧野義雄に迫ることを試みた。

## 二 牧野義雄の登場——初期の英文隨筆

牧野は一八九七年にサンフランシスコからロンドンに渡っているが、牧野がイギリスの雑誌に最初に名前を出すようになるのは、一九〇一年である。それ以後、ぼつぼつと雑誌に投稿するが、牧野のイギリスでの活動を安定させたのは美術評論家M・H・スピールマンとの出会いと言われる。スピールマンは牧野に美術雑誌『マガジン・オブ・アート』(The Magazine of Art)への執筆の機会を与えただけでなく、他の雑誌の編集長や出版社、また俳優などを紹介し、牧野のロンドン社交界デビューを支えた。スピールマンのお墨付きを得て、一九〇五年以降、牧野には執筆の依頼が相次ぐようになる。そこで本稿は、期間を一九〇一年から一九〇四年までに絞り、無名時代の牧野義雄の執筆活動を追うことにした。この四年間の牧野の活動は以下のように、まとめられる。<sup>15)</sup>

一九〇一年 二月、日本海軍造船監督事務所閉鎖の予告を受ける。

退職金として、三十ポンドを得る。<sup>16)</sup>ロンドン中央美術

学校の教師ウィルソンにより『ステューディオ』(The

Studio: An Illustrated Magazine of Fine and

Applied Art)の編集者ホルム氏を紹介される。<sup>17)</sup>

雑誌『ステューディオ』に七枚の挿絵が掲載される。ゴールドスミス校でのモデルの仕事および墓石作りの仕事をする。十一月、英駐在公使林董に会う。十二月、伊藤博文に会う。<sup>19</sup>

一九〇二年 二月、『日本ごとも囃』(*The Japanese Dummy Book*)

*London: Grant Richards*) が出版される。<sup>21</sup>

一月、野口米次郎が訪ねて来る(翌年二月まで同居)。<sup>22</sup> 十二月、「クリスマスを買う物」(*Christmas Shopping*) のイラストと記事「日本の子供たちのお正月遊び」(*How Japanese Children Celebrate the New Year*) が『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』(*The English Illustrated Magazine*) に掲載される。<sup>23</sup>

一九〇三年

一月、野口米次郎、英文詩集『東海より』(*From the Eastern Sea*) を自費出版。<sup>24</sup> 二月、挿絵入り随筆「私がロンドンで見たもの」(*What I See in London Streets*) が『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』に掲載される。<sup>25</sup>

アーサー・ランサムと知り合う。<sup>26</sup> 野口の『東海より』がユニコーン・プレスから出版がきまり、牧野が本の表紙絵を描く。<sup>27</sup> 三月、野口がアメリカに帰る。<sup>28</sup> スピールマンと会い、『マガジン・オブ・アート』の仕事をお願い負う。『イングリッシュ・レビュー』(*The English Review*)、『ブラック・アンド・ホワイト』(*Black and White*) 誌に仕事をを得る。<sup>29</sup> 八月、「ロン

ドンの日本人芸術家牧野義雄氏」(*A Japanese Artist in London: Mr. Yoshio Markino*) が『マガジン・オブ・アート』に掲載される。<sup>30</sup> 十一月、『神々の寵児』(*The Darling of the Gods*) の舞台制作、衣装、下稽古、パンフレット制作に協力(十二月末まで)。俳優ビーアボーム・ツリーと知り合う。<sup>31</sup> 十二月、挿絵入り随筆「ゲイシャ実話」(*The True Story of the Geisha*) が『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』に掲載される。<sup>32</sup>

一九〇四年

一月、劇評「神々の寵児」(*The Darling of the Gods*) が『アカデミーと文学』(*The Academy and Literature*) に掲載される。<sup>33</sup> 二月、シドネー街に引越す。<sup>34</sup> 七月、「日本人芸術家が見たイギリス教会のパレード」(*England Seen by a Japanese Artist: Church Parade*) が『マガジン・オブ・アート』に掲載される。<sup>35</sup> 八月、原撫松が訪ねてくる。(十一月から同居を始める)。<sup>36</sup>

さて、ここで、興味深いのは、『滞英四十年今昔物語』において牧野は『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』での仕事についてほとんど言及していないことである。この雑誌の仕事は、たとえアルバイトとはいえ、牧野のイギリスでの活動の中ではかなり初期のものであり、また雑誌に作品が掲載されるのであるから、彼にとって意味がなかったはずはないのだが、なぜかあまり言及したがない。一方、イギリスでの生活を詳細に描いた英文随筆

『日本人画工倫敦日記』においても、『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』の仕事についての記録は時間的正確さを欠いている。牧野はそれをスピールマンに会った後、すなわち一九〇三年の三月以降としているが、実際、一九〇二年の『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』の十二月号と一九〇三年の二月号に牧野の記事をのせており、彼の言葉とは矛盾するのである。

そもそも牧野義雄の著作には、詳細な年月の記録があるものの、それはあまりあてにならない。『日本人画工倫敦日記』では、野口米次郎の『東海より』が印刷された日を牧野は一九〇三年二月十三日としているが、これは一九〇三年一月十二日の誤りであろう。<sup>37</sup> さらに『滯英四十年』や『述懐日誌』などでは、時に一二年の誤差がある。これらは単なる記憶違いだろうが、意図的な嘘もある。スピールマンの紹介をうけ、一九〇三年に『マガジン・オブ・アート』にのせた「ロンドンの日本人芸術家―牧野義雄氏」において、牧野は、「私は一八七四年のクリスマスに生まれた」と文章を始めているが、実際は彼は一八六九年の十二月二十五日生まれである。これは『幼少時代思出の記』においても同様で、この本の翻訳者宮澤眞一氏も「著者はなんらかの理由で、自分が誕生した年を偽っている」と注をつけているが、<sup>38</sup>なぜ五歳ばかり年を偽ったのか、今のところ、理由は明らかではない。

ところで、一九〇三年の『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』二月号の「私がロンドンの通りで見たもの」という記事には、牧野の随筆の前に「編集者は、ある日本人芸術家の印象の記録であるこれらの頁と絵がこの雑誌の読者の興味をそそるものだと確信している」という推薦文が付け加えられている。この言葉から

すると、明らかに『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』の編集者のリー・ワーナーがスピールマンよりも先に牧野義雄を見いだしていたことになる。『日本人画工倫敦日記』において、牧野は野口の帰国後、職もなく、自殺することを考えるまで追い詰められていた彼を見出し救った命の恩人としてスピールマンを描き出すが『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』における牧野の活躍ぶりはスピールマンが最初に牧野に目をとめた雑誌関係者ではない可能性をも示唆している。

しかし、ここに、もう一つ問題がある。それは『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』に牧野義雄名でのった随筆が、本当に牧野本人が書いたものなのかということである。タイトルの後には単に“By YOSHIO MARKINO”とあるが、この随筆は、文体、内容からして、牧野のものとは思われない。基本的に牧野の英語は、語彙レベルが低く、文章構造も単純で、日本語での発想が透けて見えるようなものだが、この随筆には全くそのようなところがない。また日本の家は紙で出来ているなど、『蝶々夫人』から着想を得たのかと思われるような発言もある。しかしこの随筆の筆者は、第三者的な編集の立場から書くのではなく、Iという主語を用いて、あたかも牧野本人のふりをして書いているのである。無名時代にイギリスの雑誌に載った記事であるにも関わらず、牧野がこの雑誌のことをあまり言及しないのは、名前を載せながらも自分の文章ではないことに対する後ろめたさがあるのかもしれない。

ところで牧野は週刊雑誌の『キング』(The King)や『ブラック・アンド・ホワイト』(Black and White)に投稿していたと述べている。<sup>39</sup>また新聞に記事が載ったこともあるようである。しかし、残

念ながら、牧野がしばしば絵を寄せたという雑誌『キング』や『ブ  
ラック・アンド・ホワイト』は、現在、大英図書館にもアメリカ議  
会図書館にも保存がないので、どのような雑誌であったのかの実体  
はつかめない。ちなみに一九〇四年までの期間に牧野が文章を載せ  
た雑誌に『アカデミーと文学』という雑誌があるが、こちらは美術  
雑誌ではなく、文芸雑誌である。牧野の仕事場が、美術雑誌よりは  
文芸雑誌であったことは、彼のその後のイギリス社会におけるポジ  
ションをも物語っているといえよう。実際、牧野は『アカデミーと  
文学』に劇評を書いて以来、評論も手がけるようになり、絵と同時  
に、文章で有名になるのである。この牧野の雑誌における評論は、  
恒松郁生氏によりまとめられているが、一九一〇年代には『イン  
グリス・レビュー』などに書評を書くなど、さらに活発に文筆活  
動を行うようになるのである。

### 三 雑誌に掲載された随筆と挿絵について

ところで、一九〇一年から一九〇四年の間にとどのような随筆と  
挿絵が雑誌に掲載されたのだろうか。ここで紹介したいのは以下  
の六点である。

- (一) 「ピカデリー・サーカス」などスケッチ七点（『ステューデイ  
オ』一九〇一年）
- (二) 「日本の子供たちお正月の遊び」（『イングリッシュ・イラス  
トレイテッド・マガジン』一九〇二年十二月）
- (三) 「私がロンドンの通りで見たもの」（『イングリッシュ・イラ  
ストレイテッド・マガジン』一九〇三年二月）
- (四) 「ロンドンの日本人芸術家——ヨシオ・マルキーノ氏」（『マ

ガジン・オブ・アート』一九〇三年）

- (五) 「ゲイシャ実話」（『イングリッシュ・イラストレイテッド・  
マガジン』一九〇三年十二月）

- (六) 「日本人芸術家が見たイギリス教会のパレード」（『マガジ  
ン・オブ・アート』一九〇四年七月）

- (二) 「ピカデリー・サーカス」などスケッチ七点（『ステューデイ  
オ』一九〇一年）

ここには牧野のイラストが七枚掲載された。「ピカデリー・サー  
カス」〔図4〕「ナショナル・ギャラリー」、「ロンドン市内」、「ハー  
マジェステイーズ劇場入口」、「ケンジントン公園の茶店」、「アールス・  
コート博覧会」、「ライブ・クラス」である。これらの原画は愛知県  
豊田市美術館が保有しているが、牧野の初期の精微で写実的なスケッ  
チとして重要であろう。ロンドンに生きる人々のざわめきが聞こえ  
てくるような絵である。文章は編集者のチャールズ・ホルムによつ  
て書かれている。『日本人画工倫敦日記』によれば、この仕事はロン

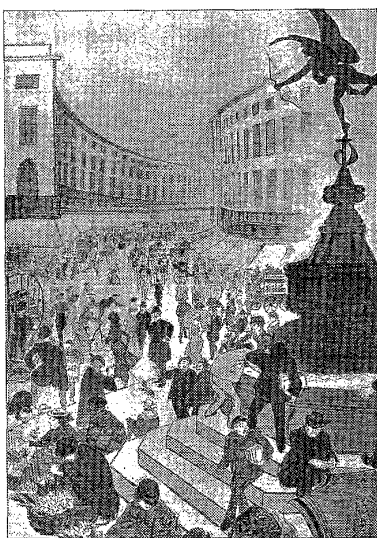


図4 “Piccadilly Circus” (1901)

ドン中央美術学校  
の教師ウィルソ  
ンの紹介によるもの  
であるが、『日本  
画工倫敦日記』で  
は原稿料のことば  
かりが書かれてお  
り、牧野はこの仕  
事にさほどの誇り



を感じているようにも思われぬ。この雑誌は美術専門誌であるが、その後牧野がこの雑誌に絵を発表した様子もない。一九〇四年以降、この雑誌にも日本美術の記事が多くなってくるが、なぜか牧野は関わっていない。なお岡倉天心はこの雑誌の二十五号（一九〇四年）に日本の現代美術についての記事を寄稿している。

(二)「クリスマスのお買い物」および「日本の子供たちお正月の遊び」『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』（一九〇二年 十二月号）

一九〇一年から一九〇三年にかけて、牧野は『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』に三回記事



図5 “Christmas Shopping” (1902)



図6 “How Japanese Children Celebrate the New Year” (1902)

イラストレイテッド・マガジン』に三回記事を掲載しているが、最も早いのが一九〇二年の十二月号に掲載された「日本の子供もたちのお正月の祝い方」である。この号には「クリスマスの買い物」という題名の白人女性を描いた絵も掲載されている〔図5〕。一方、「日本の子供もたちのお正月の祝い方」に

は挿絵が八枚入っているが、こちらは控えめな感じのスケッチである〔図6〕。この記事には“Told and Drawn by Yoshio Markino”とあるので、文章は編集者が責任を持ったのだろう。牧野が紹介する典型的な日本人の子供の正月遊びとは以下のとおりである。一、針落とし、二、書初め、三、漫才、四、凧、五、破魔弓、六、手鞠、七、独楽、八、羽根つき。破魔弓以外は男子と女子とが交じり合うことなく遊んでいる様子が描かれる。またイラストからもわかるように、武家階級の裕福な子供たちの生活が描かれている。

(三)「私がロンドンの通りで見たもの」『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』（一九〇三年 二月号）

前述したとおり、文章は編集者によるもので、牧野が書いたものではないと判断したほうが無難であろう。文章の洗練度は高いが、個人的なエピソードが少なく、「ユーモラス」なロンドンの人々の生態を描き出そうとする努力にもかかわらず、面白みに欠ける内容である。日本の家が紙でできているなど、牧野なら書かないであろう内容も盛り込まれている。挿絵は八枚あるが、風景画はなく、人間に

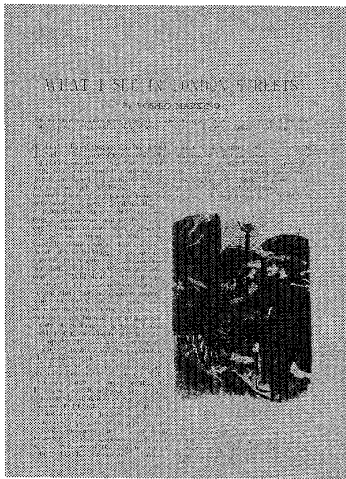


図7 “What I See in London Streets” (1903)

焦点があてられている〔図7〕。作風としては、雑誌『ステューディオ』に載せられたものに近いが、群集を描いた絵ばかりで、全体的にあまり魅力的なものではない。

(四)「ロンドンの日本人芸術家——ヨシオ・マルキーノ氏」『マガジン・オブ・アート』(一九〇三年)

生い立ちを簡単につづったもので、『日本人画工倫敦日記』や『幼少時代思出の記』などの英文随筆集に先立った自伝的随筆である。特筆すべき点は、牧野義雄の年齢偽証がここから始まっていることである。しかしこの文章を、実質上、牧野自身による英文随筆の最初のものと考えていいのではないだろうか。この意味で、この記事は牧野の随筆家としてのキャリアを考える上では、最も重要なものと思われる。

ここで牧野は自分が「サムライ」の階級に生まれており、祖父が絵描きであったこと、子供のころから絵を学んでいたことなどを語っている、また自分のモットーは「ありきたりのものを描き、そこに高い芸術を示すこと」と述べ、「もし私たちが芸術的な目を持っていたならば、全てが芸術的になるのだ」と彼自身の芸術論も語っている。さらに自分の芸術は日本的なもの、西洋的なものの「混淆」と呼ばれるが、自分は自分が受ける印象にしたがって描いているのだと言い、自分の絵が常に出版社から拒絶されてきたこと、日本人の同胞は自分に同情してくれないばかりか、日本に帰ったほうがいいと言ふことなど、生活の苦境についても切々と語っている。そして



図8 “London Seen with Japanese Eyes : Marylebone Church” (1903)

だと言い、自分の絵が常に出版社から拒絶されてきたこと、日本人の同胞は自分に同情してくれないばかりか、日本に帰ったほうがいいと言ふことなど、生活の苦境についても切々と語っている。そして

彼に親切にしてくれた人間として、P・H・リー・ワーナーと王立水彩画協会のリジナルド・バレットをあげ、雑誌『ブラック・アンド・ホワイト』の仕事を手話してくれたことに対して感謝の辞を述べているが、ここからも、『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』のリー・ワーナーが当時の牧野にとつては重要な人物であったことが裏付けられる。もちろんこの記事にも、牧野の水彩画が掲載されている。それらは「メリルボーン・チャーチ」[図8]と「図書館の新しい部屋」[ロンドン・トラファルガー広場の夜]である。牧野は挿絵を描くことなく、雑誌に登場することはない。この意味では、彼は一貫して画家である。

(五)「ゲイシャ実話」(『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』一九〇三年 十二月号)

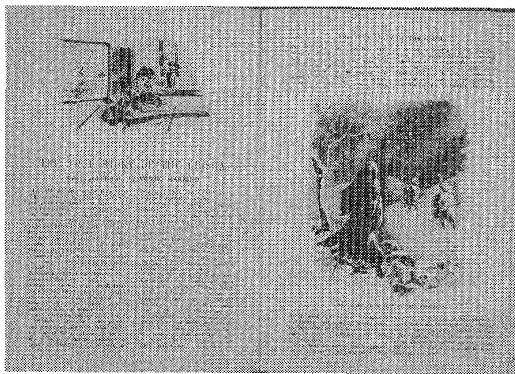


図9 “The True Story of the Geisha” (1903)

「ゲイシャ」といいながら、内容は白拍子の静御前の物語である。源平の戦い、そして義経との出会いから、静御前の自害までの伝説をイラストとともに綴っている[図9]。この話の後に「ゲイシャ」についての解説を加えているが、牧野はゲイシャがいかに舞踊や楽器の訓練を受けているかについて強調し、オペレッタの描く陽気なゲイシャ像を欧米人のつくりあげた虚像

としている。この記事は牧野にとっては単なる金稼ぎのための仕事と考えられるが、日本文化紹介として意義あるものである。ちなみに牧野は一九〇〇年における川上貞奴のロンドン公演を見ている。一途で貞節な静御前の物語を「ゲイシャ」の物語として提示するのは、武家出身であることを誇りとする牧野らしい選択である。なお『日本人画工倫敦日記』には、『ハーパーズ・マガジン』の編集者がフランス人女性芸術家を紹介してくれ、その女性がゲイシャの絵を描く仕事をくれたと述べているが、ゲイシャ・ブームにより、牧野は経済的な糧を得ていたようである。

(六)「日本人芸術家が見たイギリス―教会のパレード」『マガジン』

オブ・アート』(一九〇四年 七月)

この記事には文章はなく、牧野の水彩画が載せられている。ジェームズ・マクニール・ホイッスラー的構図を用い、立ち姿の美しい英国人女性が描いた「教会のパレード」(図10)は、英文随筆『わが理想の英国人女性』(一九二二年)を彷彿させる。『日本人画工倫敦日記』の中でも牧野は臆面もなく白人女性の美しさを強調するが、注意しなければならないのは、牧野は白人女性美への絶対的な崇拜者ではなかった点である。英文著作だけを読めば、西洋的な自由恋愛の支持者であり、白人女性の賛美者のように読めるが、『滞英四十年』において牧野は、「一言すれば、日本には或英婦人のような非常な別嬪も居ないが、又或英婦人のやうな驚く可き醜婦も居ない」とイギリス人女性に対し、辛辣である。ただし、牧野義雄がクリスタベル・パンクハーストといった女性参政権運動家と交流し、イギリスの男尊女卑社会をアウトサイダーの視点から批判していたこと

は覚えておくべきことだろう。

以上、六本の記事が、牧野の初期の代表的な活動であることは確かであるが、彼が文章と挿絵の両方を担当できることが大きなアピールポイントとなったといえよう。特筆すべきは、牧野が雑誌に記事を掲載するチャンスを得たのは、彼が「日本文化」の媒体者であり、「日本の視点」を提供することができる人物であったからである。イギリス社会は、牧野が「日本人」であるからこそ歓迎したといえよう。牧野の「ジャパニーズ・イングリッシュ」もイギリス人にとって魅力的だったのだろう。

この牧野のデビューのありかたは、中国系でありながらアメリカでジャポニスム小説を発表したカナダ人オノト・ワタンナことウィニフレッド・イトンとよく似ている。ワタンナの場合は、小説を雑誌に投稿することによって頭角を現すのだが、「日本人」として認められ始めると、『レディーズ・ホーム・ジャーナル』のような雑誌に日本文化を紹介する記事を書き始める<sup>41</sup>。ワタンナの場合は、



図10 “England Seen With Japanese Eyes: Church Parade” (1904)

日本の女性の暮らし方やゲイシャについての記事を書いた。ただし、日本人でないワタンナが日本人であることを強調するために着物を着た肖像写真を公開したのとは対照的に、牧野の写真には着物姿は見当たらない。名前の綴りにもRをつけていたことから、牧野自身は日本人であることを強調したくない部分もあったのではないかと推察される。

ところで牧野義雄としばしば比べられる人物に挿絵画家のゲンジロウ・エトこと、片岡源次郎<sup>42</sup>がいる。佐賀出身の片岡は、一八八九年から一九一一年までの間アメリカに滞在しており、<sup>43</sup>牧野義雄が活躍した時期に、片岡もまたアメリカで挿絵画家として活躍していたのである。片岡は一九〇二年に出版された野口米次郎の『日本少女の米国日記』の挿絵を担当しているので、この時までには野口の交友範囲の中に入っていたことは予測される。また一九〇二年に上演されたジャポニスム演劇『神々の寵児』の舞台美術などに協力したことが、女優ブランチ・ベイツによって語られている。<sup>44</sup>牧野義雄と片岡源次郎の接点はいまだ見つかっていないが、この二人の無名の日本人挿絵画家が、片やニューヨーク、片やロンドンで、『神々の寵児』という日本を題材とした演劇の舞台の制作に関わっていたことは興味深い事実であろう。彼らは英米のジャポニスム・ブームに支えられたと同時に、ジャポニスム・ブームを支えたのである。

#### 四 ジャポニスム演劇『神々の寵児』と牧野義雄

牧野は、一九〇三年の十一月初旬から初日の十二月二十八日まで、約二ヶ月間、『神々の寵児』のリハーサルに毎日朝の十一時から夕方四時までつきあい、演技や衣装の指導を行うとともに、この劇

の舞台装置やパンフレットを作るなど、多岐にわたって協力をして  
いる。このことは『滞英四十年』に、以下のように記されている。

十月の末頃であつた。スピールマン先生は、

「僕の親友で名優のツリーが、何か日本の芝居をやるといふことだから、君のことを話しておいた。二三日中にツリーが君に手紙を出すことになつてゐるから、その時は是非助けてやつてくれ給へ」

といつた。果して二日目に、名優ハーバート・ビーアボーム・ツリー氏から手紙が来た。劇場に訪ねて行くと、舞臺装置や衣裳、それから俳優一同のメイクアップをやつて欲しいといふことだつた。上演する劇はダーリング・オブ・ゴッドという日本劇で、米國のベラスコの原作だつた。(二六頁)

この仕事はスピールマンの紹介によるものだが、ロンドンの有名な俳優との付き合いを通し、牧野の名前もしいに人々に知られるようになるのである。

『神々の寵児』(The Darling of the Gods) はアメリカ演劇界の巨匠デイヴィッド・ベラスコとフィラデルフィア出身の作家ジョン・ルーサー・ロングの共作であるが、一九〇二年の十一月にワシントンで初演され、十二月からニューヨークのベラスコ・シアターで開幕した。ベラスコとロングのコンビは『蝶々夫人』(Madame Butterfly) の製作者として有名だが、実際のところ『神々の寵児』の初演時の上演回数は一八六回を記録しており、『蝶々夫人』の四十四回をはるかに上回るものであつたという。アメリカの舞台で主役の日本女性ヨースさんを演じたブランチ・ベイツは、地方公演も含めると、実に千回以上もその役を演じたという。この意味で『神々

の寵児』は、二十世紀初頭のアメリカでは一大ブームをひき起した舞台であったといえる。アメリカで大成をおさめたこの劇を、ロンドンの名優ピーアボーム・ツリーが輸入したのは、初演からちょうど一年後の一九〇三年の十二月であったが、ロンドンでの興行も成功に終わったようである。

牧野の『神々の寵児』との深い関わりを示す資料として、現存するものとしてはパンフレットと書評がある。パンフレットは、各場のイラスト六枚から構成されており、カラー版の豪華なものである。〔図11、図12〕。このパンフレットには、キャストとレイモンド・ブレイスワートによるエッセイがはじめの頁にこそせらわれているが、俳優や女優についての説明記事などはなく、ほとんど牧野義雄イラスト集といってもいいようなものである。この意味では、『神々の寵児』は牧野にとって、きわめて大きな仕事であったとい



図11 Souvenir Programme of *The Darling of the Gods*, His Majesty's, London



図12 Souvenir Programme of *The Darling of the Gods*, His Majesty's, London

いだろう。

『アカデミーと文学』に掲載された書評が牧野の評論家としての最初の活動であることはすでに述べたが、牧野の挿絵（ツリー像）とともに掲載された劇評〔図13〕において、牧野は『神々の寵児』を曾我兄弟の物語に匹敵するものとし、きわめて「日本的」であると高く評価している。牧野はロンドンの俳優たちとの友好的な関係について書くと同時に、団十郎の演技などに言及し、日本の演劇についての知識をひけらかす。おそらくこの劇評は、「知識人」としての牧野義雄をアピールするのに十分であったろう。その後、牧野は『イングリッシュ・レビュー』などの雑誌で書評も手がけるようになり、また儒教や老荘思想などを基盤とした哲学的な評論も発表するようになるが、『神々の寵児』の劇評には、牧野の評論家としての萌芽を見ることができるのである。

Egmont

When on the days of my youth were spent in vain reading I sometimes try to dwell. I have little Latin and less Greek, and but a poor hand at French and of German have I none. Therefore in my youthful contact to books written in the English tongue and does not this suffice for one little life? And I remembered to become a Greek or Latin scholar needs must have I neglected the tongue of the land of my birth. Of the Latin and the Greek I know sufficient for enjoyment, having quite a nodding acquaintance with Homer, Euripides, Plato, Aristotles, Aristotle, Ovid, Terence, Cicero—and not one or two others. Of the literature of France and Germany I have read much in translations and know them a deal in critical histories. What then have I lost and gained by this my ignorance?

I have lost a knowledge and appreciation of the style of various famous men of letters of the old days and of the present; but then my little knowledge has enabled me to understand their meaning. As for those who are only one, I care not for them—what worth is a style without a soul? I have gained in this that I have read more than most men in the literature of my own country. Besides as in my library, if so long as mine is not capacious for so small a collection of books, there are many volumes on my shelves that I have not yet read and I sometimes ask myself if ever I shall have time so to do. Yes, I think that on the whole I may not correct with my reading being limited to one tongue and that tongue the most of them all. In what branch of literature can I not read of the best and highest? Poetry, fiction, history, theology, drama, philosophy, letters, criticism, biography, are there not of the best of all those in the English tongue? And is not the only one about to read in his own tongue all that one would wish to see half or a quarter? He others feel that some of deeper that make me as often as I stand in a great library, and looking around, realize how much there is that I would not should read as I had the years to do so?

Was it right that I should have been left as a child to read those books I delighted to rattle them about which in the general opinion would have been most profitable to me? Of course the small run of children's books were not in my way, Alvin Anderson, Grimm, "The Arabian Nights," "The Tales of Washington," and so forth, are friends still of them. What more I wanted I chose out for myself. Dante, Spenser, Byron, Shakespeare, Milton, Addison, Pope, many others, most of them still friends of acquaintance. At school my teachers would have had me to read the Bible, Ovid, Virgil, Homer, Shakespeare, Milton, Coleridge, and some others, but finally I found them for themselves and a moment of leisure-work could render them distasteful. For good or ill I sought out my friends for myself, have kept and loved them, and have gained good from them.

Am I singular in all this? I doubt if any one of us all is singular in anything; we are all so diversely similar. Surely in our good ways and our bad ways. One of my bad ways is to forget to-day what I have promised to do tomorrow, to speak of things I never will not come to me or of good things I am sure never to receive. I make a new year's resolution of being frugal at the club on Christmas day, forgetting my old friends' anniversary, perhaps I buy too many books and too little among live folk. That, then, is my way, and my ways are pleasant to me.

"The Darling of the Gods"

Many people have been asking me how much Mr. Tree set a Japanese, he is too well. Such questions are more ignorant from a theatrical point of view. Suppose one visit an artist, and looking at a picture painted on a small canvas, asks the



MR. TREEHORN TREE AT BIRMINGHAM. (From a Souvenir by Fredrick H. Green)

図13 "The Darling of the Gods" (1904)

ところで、牧野が『神々の寵児』を本当に評価していたのかといえは、どうやらそうではないようである。『滞英四十年』では、「劇中日本精神を全然現さないとはいへないが、余程毛唐臭いもので、毛唐七分に日本三分くらゐのところだつた」と辛辣な言葉を残している。牧野の「二枚舌」は、彼の英語随筆と日本語随筆を読み比べると顕著であるが、ここから彼が読者層を強く意識した作家であつたことが推察される。牧野義雄はその平明な英語の文体から、子供のように素直で純朴な人間と推察されるが、真実の牧野の姿はそのような単純な人間像に収まるものではないだろう。

#### 結びにかえて

以上、一九〇一年から一九〇四年までという短い時間に限定して、牧野義雄の雑誌随筆を見てきたが、画家として以上に、文筆家としての牧野の側面は、単に「偉業」を褒め称えるだけでなく、詳細な検討が必要であると思われる。その検討により、また別の牧野義雄像が見えてくるのではないだろうか。

#### 注

1 この他、牧野には、ダグラス・スレーデンの本の挿絵などを含め、数点の作品がある。豊田市教育委員会出版の『牧野義雄物語』（一九九九年）に、牧野義雄書誌として、出版された資料についてのリストがある。また、牧野義雄研究会による『知られざる文人画家牧野義雄再評価の試み』（愛知大学清水研究室

発行、二〇〇〇年）には清水一嘉氏による「牧野義雄著作解題書誌」がある。

2 湯河原の重光葵記念館には、牧野のスケッチ、油絵が数点展示されている。

3 *The Geisha* については橋本順光「茶屋の天使——英国世紀末のオペレッタ『ゲイシャ』（一八九六）とその歴史的文脈——」『ジャポニスム研究』二十三号（二〇〇三年）、三〇—五〇頁が詳しい。

4 この点に関しては、川本浩嗣「ムスメに魅せられた人々——英詩のジャポニスム」『ジャポニスム研究』二十一号（二〇〇一年）、一〇—二七頁を参照。なおムスメブームについては、満谷マーガレット「ムスメたちの系譜」（川本浩嗣編『美女の図象学』思文閣出版、一九九四年）を参照のこと。

5 Clive Holland, *My Japanese Wife* (New York: Frederick A. Stokes, 1902) の序に作者本人が書いている。

6 Clive Holland, "The Women and Girls of Chrysanthemum Land." *The English Illustrated Magazine* 13 (May, 1904), pp. 147-154.

7 Charles Thonger, "Hana San." *The English Illustrated Magazine* 33 (June, 1905), pp. 266-270.

8 Honora Twycross, "Japanese Pictures." *The English Illustrated Magazine* (September, 1904), pp. 511-537.

9 H. Knight Harris, "Miyoko." *The Ideler* 35 (1909), pp. 464-479.

10 "Three Japanese Fables." Translated by Mary. *The Ideler* 35

- (1909), pp. 656-662.
- 11 ドウス昌代『イサム・ノグチー宿命の越境者』(講談社文庫、二〇〇四年)、五八頁。
- 12 Yoshio Markino, *A Japanese Artist in London* (London: *Chatto and Windus*, 1912), pp. 67-68. および『イサム・ノグチー』、六〇—六一頁。
- 13 カーメン・ブラッカー「牧野義雄」(関口英男訳『英国と日本—日英交流人物列伝』イアン・ニッシュ編、博文館新社、二〇〇二年)、二二六頁。なお、Betty Shepardの回想“Recollections of Yoshio Markino and Mamoru Shigenitsu”は *Alone in the World* (Ed. Sammy I. Tsunematsu. In Print Publishing, 1993) におさめられている。
- 14 宮澤眞一『幼少時代の思出の記』(牧野義雄著・宮澤眞一訳。豊田市教育委員会発行、平成二年)、二二九頁。
- 15 牧野の作品では年号が微妙に異なるものが多い。それが年譜作りに混乱を引き起こしている。できるだけ客観的なデータを探したが、牧野の証言しかない場所は、年号の整合性が比較的正しい *A Japanese Artist in London* を参考にした。
- 16 *A Japanese Artist in London*, p. 34.
- 17 *A Japanese Artist in London*, p. 34.
- 18 雑誌 *The Studio* の仕事およびモデルと墓石作りの仕事については *A Japanese Artist in London* の 3 章、4 章、5 章に記述がある。
- 19 牧野義雄『滞英四十年』(改造社、昭和十五年) 一三一—一五頁参照。
- 20 牧野義雄『滞英四十年』、一六一—一七頁参照。
- 21 *A Japanese Artist in London*, p. 57.
- 22 *A Japanese Artist in London*, pp. 63-69. および『イサム・ノグチー』、五八—六五頁参照。なお『牧野義雄物語』の年譜では一九〇一年十一月から一九〇二年四月まで野口と同居したと書かれているが、これは誤りであるようだ。
- 23 Yoshio Markino, “Christmas Shopping,” “How Japanese Children Celebrate the New Year,” *The English Illustrated Magazine* (1902), pp. 192-200.
- 24 『イサム・ノグチー』、六〇頁。『滞英四十年』、二〇頁。
- 25 Yoshio Markino, “What I See in London Streets,” *The English Illustrated Magazine* (February, 1903), pp. 425-431.
- 26 *A Japanese Artist in London*, p. 68. 『滞英四十年』、二〇頁。
- 27 *A Japanese Artist in London*, p. 68.
- 28 『滞英四十年』、二〇頁。
- 29 *A Japanese Artist in London*, pp. 76-79.
- 30 Yoshio Markino, “A Japanese Artist in London: Mr. Yoshio Markino,” *The Magazine of Art* 1903, pp. 504-506. なお『滞英四十年』では一九〇二年とされるが(二五頁)、これは記憶違いである。
- 31 *A Japanese Artist in London*, p. 96-101. 『滞英四十年』、二六頁。pp. 26.
- 32 Yoshio Markino, “The True Story of the Geisha,” *The English Illustrated Magazine* (December, 1902), pp. 276-282.
- 33 Yoshio Markino, “The Darling of the Gods,” *The Academy*

- and *Literature* (2 January, 1904), pp. 17-18.
- 34 *A Japanese Artist in London*, p. 103 『滯英四十年』一六六頁。
- 35 Yoshio Markino, "England Seen by A Japanese Artist: Church Parade." *The Magazine of Art* (1904), pp. 76-77.
- 36 原撫松の關係について『A Japanese Artist in London』第七章をよむ。Yoshio Markino, *My Recollections and Reflections* (London: Chatto&Windus, 1913) の第二章を参照。しかし、ここでは原が訪ねてくるのが一九〇五年の初秋となっているが、これは一九〇四年初秋の誤りである。
- 37 『イサム・ノグチ』一六〇頁。
- 38 宮澤真一「訳者注」『幼少時代の思出の記』一三四頁。
- 39 *A Japanese Artist in London*, p. 63.
- 40 Sammy I. Tsunematsu, ed. *Alone in the World: Selected Essays of Yoshio Markino* (Brighton, UK: In Print Publishing, 1993) を参照。
- 41 ワタナベの作家経歴については Diana Birchall, *Onoto Watana: A Story of Winnifred Eaton* (Urbana: U of Illinois UP, 2001) が詳しい。
- 42 片岡源次郎については、羽田美也子『ジャポニズム小説の世界』(彩流社、二〇〇五年) の第五章に詳しい説明がある。
- 43 『ジャポニズム小説の世界』一四二頁。
- 44 *San Francisco Call* (n.d.), New York Public Library for the Performing Arts, David Belasco Paper, Microfilm Reel 16.
- 45 *A Japanese Artist in London*, pp. 96-101.
- 46 この劇については、拙稿「アメリカ世紀転換期のジャポニズム演劇——デイヴィッド・ベラスコとジョン・ルーサー・ロントラの『神々の寵児』(1902)について」『ジャポニズム研究』二十七号(二〇〇七年)を参考にされたら。
- 47 この点については David Belasco, *Six Plays: Madame Butterfly, Du Barry, the Darling of the Gods, Adrea, the Girl of the Golden West, the Return of Peter Grimm* (Ed. Montrose J. Moses, Boston: Little Brown, 1928), p. 142 以下を Internet Broadway Database (<http://www.ibdb.com>) を参照。
- 48 William Winter, *The Life of David Belasco* (New York: Mofatt, Yard and Company, 1918) Vol 2, pp. 109-111 を参照。
- 49 Yoshio Markino, "The Darling of the Gods." *The Academy and Literature* (2 January, 1904), p. 18.
- 50 『滯英四十年』一六六頁。

\* 本稿は平成十八年から十九年度の科学研究費補助金(基盤研究C・課題番号18520229)による研究成果の一部である。なお調査にあたり、ロンドン漱石博物館館長・崇城大学教授の恒松郁生氏と豊田市美術館学芸員成瀬美幸氏から助言を受けた。末筆ながらこの場をかりてお礼申し上げたい。